



洋画の世界とは一味違う日本画の表現美は独特の世界。水彩画のように淡い色彩、色の濃淡を基調とした画風にじっと見入っていると、ざわめいていた感情が穏やかに落ち着いてくるようです。古くから受け継いだ日本人の感性になじむからかもしれません。私たちは、息づく生命感を表現してきた作品を前にして、日々当たり前のように食い散らかしている野菜や農作物が可憐な花を咲かせ、しっかりと命を燃やして生きていく姿に改めて気付かされるのです。

今や数少なくなつた道内在住日本画家の一人。中でも植物、特に農作物の野菜を題材に、独特の境地を表現する異色の画家です。土と共に生きてきた日々の観察の中から生み出された野菜画、植物画は、中でも精緻な表情を生き生きと見せてくれます。

真つ赤な大輪の花が群生する様子が鮮やかに描かれている「牡丹(変形70号)」は、今年9月に完成した最新作。純生美術展から手元に戻ってきたばかりです。

「牡丹は日本画では嫌われる花でね、描く人はだれもいないんですよ。でも私は好きで、何度も写生して、凝ってね」。主題になっている真紅の花もさることながら、細かな葉脈までも息づいているようです。

「今はバラの花に凝っていて、何とか描こうと思っているんですよ。これからはそんなに大きな作品でなく、私らしい絵を描いていきたいなあ」と新たな構想のイメージも固まりつつあるようです。

ほかに手芸も得意で、お雛さまや鞠(まり)作品も多数あります。

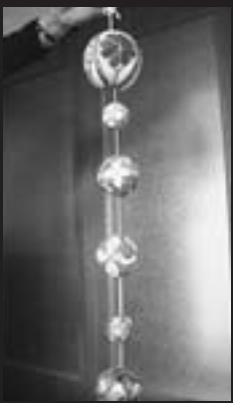
「逃げ場が絵だったのかもしれない」。日々の農作業、生活、そして高齢な姑さんの介護、子育てなどに明け暮れ、「ちよつとの合間ちよつとの時間を見つけては描いていた。だから部屋は絵の具など出っぱなしだった。ゆっくり出来たのはお正月の元旦くらいだった」といいます。

野菜シリーズをテーマに描き始めて12、13年。かぼちゃとエンドウを合わせて描き、1990(平成2)年の道展に出展したのがきっかけでした。ありとあらゆる野菜を描いたそうです。「結構おもしろかった」と意欲にあふれていた多作時代の当時を振り返りました。

お寺の総代をしていたことが縁で、東弘寺に作品を寄進しています。「仏画を描いていると心穏やかになれる。最後の作品にはぜひとも100号くらいの曼荼羅(まんだら)絵を描きたい。今、いろいろ構図も考えているところなんですよ」。



「アカザ咲く」



鞠(まり)



お雛さま



「牡丹」変形70号



「秋模様」

くぼ えみこ
久保 詠美子さん / 農民画家 / 21区 ☎82-3688

福島県出身、68歳。農家の6人兄弟の中に生まれ、地元の中学校を卒業後、東旭川町(当時)の農家に出稼ぎのため来道。夫、康弘さん(76)＝氷土会の創立会員、新ロマン派(彫刻)＝と19歳で結婚。東川町で農家の嫁として農作業に「いそむ傍ら、1984(昭和59)年に、晩年の日本画家、小浜亀角(旭川、院展院友＝1985(昭和60)年、86歳で逝去)に師事して仏画を描き始めました。その後テーマを野菜に絞って1990(平成2)年から道展に出品。3年前の「収穫」(100号)の大作まで、連続13回入選しています。道展に所属している日本画家のグループ展「北の日本画展(札幌)」に毎年出品していた時期も。近年体調がすぐれなかったため、5年前の「二人展」(旭川)を最後に、グループ展など積極的な活動をしばらく休止していました。代々東弘寺(東町1)と縁があり、久保家が寺総代をしていた時もある。同寺には、十三仏、三十三仏、大日如来観音の仏画を寄進。小樽市内の旧青山別邸(小樽貴賓館)1階大ホールには、葵をモチーフにした天井画作品もあります。純生美術会員。1994(平成6)年、東川町文化奨励賞。